

古代エジプト人と「古い」

内 田 杉 彦

明倫短期大学 歯科衛生士学科

Ancient Egyptians and Old Age

Sugihiko Uchida

Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

キーワード：古代エジプト, 古い, 高齢者

Keywords: Ancient Egypt, Old Age, The Elderly

1. はじめに

人間は誰しも年を重ねるごとに気力や体力の衰えを感じ、「古い」を自覚する。「古い」とどう向き合うか、老後の日々をどのように過ごすかは普遍的な課題と言えるだろう。とくに「超高齢社会」である我が国においては、「少子化」が進むとともに、高齢者の老後をどう支えていくのかがいっそう切実な問題となっている。

こうした今日的な問題、人間の「古い」や「老後」といった問題と「古代エジプト」は、一般的にいったあまり結びつかない。「古代エジプト」と聞いて心に浮かぶのは多くの場合、壮大な遺跡や美しい美術品など、深刻な現実を東の間でも忘れさせるような神秘的でロマンに満ちたイメージであろう。しかし現代社会からは遠い存在に思える古代エジプト社会に暮らしていた人々にも「古い」の日々が訪れていたことは言うまでもない。彼らもまた彼らなりに「古い」と向き合い、自分たちの「老後」について思いを巡らしていたのである。現代とは生活環境や価値観が異なっていた古代エジプトの人々は「古い」をどうとらえており、彼らの「老後」とはどんなものだったのだろうか。

2. 古代エジプト人の寿命

古代エジプト人はどれほど長く生きられたのだろうか。個人の誕生日や死亡日が記録されたのはプトレマイオス朝時代になってからであり、そのような記録も19人分しか残っていないので、そこから計算した平均死亡年齢（男性：54歳，女性：58歳）は古

表1 古代エジプト年表(内田杉彦『古代エジプト入門』岩波書店, 2007の年表より)。

先王朝時代(紀元前5500~3000年)

王朝時代(紀元前3000~332年)

初期王朝時代(第1~2王朝:前3000~2682年)

古王国時代(第3~6王朝:前2682~2191年)

第一中間期(第7~11王朝:前2191~2025年)

中王国時代(第11~12王朝:前2025~1794年)

第二中間期(第13~17王朝:前1794~1550年)

新王国時代(第18~20王朝:前1550~1069年)

第三中間期(第21~25王朝:前1069~712年)

末期王朝時代(第25~31王朝:前712~332年)

ギリシア系王朝時代(前332~30年)

プトレマイオス朝時代(前304~30年)

ローマ支配時代(前30年~後395年)

代エジプト人の平均的な寿命を示すものとは言えない¹⁾。そこで、よりバランスのとれた情報を得るために、当時の墓地に埋葬されていた遺体を調べ、歯や骨の状態などから死亡年齢を推定する方法がとられている。1960年代に大英博物館所蔵のミイラのうち35体について行われた調査では、平均死亡年齢40～45歳という結果が出された²⁾。1970年代には、チェコスロヴァキア国内に所蔵されているミイラ約100体が調査され、完全な状態の53体から、男性43.7歳女性41.3歳という結果が得られている²⁾。調査対象となったのは、複数の遺跡から集められたさまざまな時期のミイラであり、こうした調査結果は大まかな目安に過ぎない。とはいえ、死後に遺体をミイラにしてもらったのはいつの時代も比較的裕福な人々であり、推定された死亡年齢（おおよそ40～45歳）が当時の中流以上の人々の平均余命に近いとみることはできるだろう。

ミイラとされなかった庶民の遺体については、アブシールとサッカラで出土した末期王朝～プトレマイオス朝時代の人骨計521体から推定された平均死亡年齢がそれぞれ19.5歳と23歳、ヌビア北部のワディ・キトナに埋葬されていた紀元後3～5世紀の人骨609体のそれは20.1歳であった。調査対象の人骨には乳児のものも含まれるため、乳幼児期を過ぎた庶民の平均余命はいくぶん高めに20～25年と見積もられている¹⁾。

古代エジプト人の平均余命が総じて低かった背景には何があったのだろうか。大河ナイルの流域であるエジプトは、食糧になりうる動植物と豊富な水に恵まれ、灌漑農耕による豊かな収穫が得られたとはいえ、その気候風土や生活環境は必ずしも健康的なものではなかった³⁾。昼夜の温度差が激しく埃っぽい気候、ナイルの水中に生息する寄生虫、劣悪な衛生環境などが風土病や疫病の原因となっていたのである。こうした病気に対しては、当時の不十分な衛生観念や医術では正しく理解・対処できず、現在では治療可能な病気も致命的なものとなるが多かったと思われる。とりわけ出産にはかなりの危険がともない、妊産婦や胎児、新生児が生命を落とすことも稀ではなく、乳幼児の死亡率もまた高かったであろう。

ミイラと人骨の調査に示された平均余命の差は、当時の社会に厳然として存在した格差をそのまま反映している。高級官僚とその一族からなる貴族（上流階級）は広くて衛生的な邸宅に住んで多くの使用

人の世話を受け、身体や身の回りを清潔に保ち、栄養豊富で変化に富む食事を楽しむことができた。病気になった時も、当時としては恵まれた医療を受けられたのである。貴族の使用人のなかでも地位の高い人々、中級以下の官僚やその一族などの中産階級もまずまず快適な暮らしを楽しめただろう。これに対して社会の底辺に位置していた庶民の多くは不衛生な狭い家に住み、粗末な食事で我慢するほかなく、病気にかかっても医師の治療を受けるのは容易ではなかったに違いない。とくに小作農民は、王墓・神殿の造営やそのための採石遠征など王家が行う大事業に単純労働者として加わらねばならなかった。その労働環境は苛酷であり、たとえば第20王朝の国王ラメセス4世治下（前1150年頃）の採石遠征では、参加した9268人のうち、じつに900人が死亡したことが記録されている²⁾。庶民は高い階層の人々に比べ、はるかに大きなストレスにさらされた生活を送っていたのであり、これが平均余命の差となっておりとみられる。

しかし、中流以上の人々にとってもこの世の生活は決して長いものとは感じられなかった。彼らが建てた墓の壁面や墓碑には、墓主が来世への復活を果たしそこで不自由なく暮らすためのさまざまな呪文が刻まれているが、こうした呪文のなかには「大いに良く老いた後に」（ie.長生きをして幸せな老後を過ごした後に）つつがなく埋葬されるように願った呪文がしばしば含まれている²⁾。また、新王国時代後期の書簡には挨拶の言葉として、神々が「長い人生」と「大いなる良き老年」（ie.長寿と幸せな老後）を授けたまうようにという祈願文がみられるのである²⁾。

自らの人生について記録を残すことのできた身分の高い人々のなかには、この願いを人並み以上に実現して、当時としては異例とも言える長寿に達したとみられる人々がいる。第19王朝の国王で、おそらく25歳ほどで即位してから66年あまりも在位し、90歳ほどで世を去ったとみられるラメセス2世はなかでも有名な人物といえるだろう²⁾。この王のもとの、国家神アムン・ラーの大司祭をつとめたバクエンコンスも古代エジプト人としてはかなりの長寿者だった。この人物の座像に刻まれた伝記によれば、彼は（官僚養成のための）書記学校で4年間学び、王室厩舎で11年間の見習いを経験してから、アムン・ラーの神官として43年間を過ごし、大司祭に昇進して27年間を生きたとされている。彼の経歴はじつに85年

に及び、書記学校に5～6歳で入学したとすれば、彼は少なくとも90歳頃までは生きていたと考えられる²⁾⁴⁾。

第18王朝の国王アメンホテプ3世のもとで大規模な建築事業を指揮し、数多くの神殿造営に関わったアメンホテプ（「ハブの息子」）も長生きだったことが知られている。彼の彫像のひとつ（図1）に刻まれた銘文には、自分は公明正大な人物で、高齢に達したのはその証であり、自分は80歳で、これから110歳まで生きるであろうと記されているのである²⁾⁵⁾。

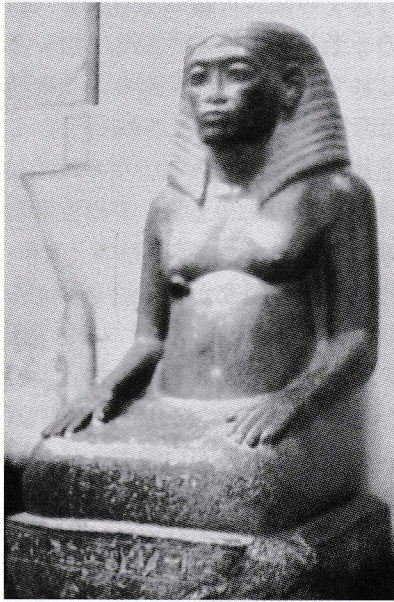


図1. 老年の容貌を示すアメンホテプの座像（第18王朝時代）

長寿を正しい生き方に対する報いとし、110歳を理想の寿命とみなすこの考え方と同様のものは、紀元後100年頃の教訓文学である「パピルス・インシナーの教訓」にも示されている¹⁾²⁾。ここでは人間の一生が、子供としての10年間、教育を受ける10年間、職業の技術を身につける10年間、老年に達するまでの10年間、そして寿命を決める神であるトトが敬虔な人間に割り当てる60年間に分けられている。40歳になると「老年」であるとする見方は、当時の（文字が読め、この教訓の読者だったはずの）中流・上流階層のミイラから推定される平均余命とほぼ合致する。40歳を越えて長生きすることは少数の人々にのみ許された幸運、神の恩寵だったのであり、110歳（あるいは100歳）は、理想とされた究極の長寿だったのである。

中王国時代の文学作品「ウエストカー・パピルスの物語」には、この110歳に達した呪術師ジェディが登場する。ジェディは食欲旺盛な人物として描か

れ、彼を宮廷に招こうとする王子からこう語りかけられる²⁾⁶⁾。

「あなたのご様子は、老年に達する前に生きている人のようです。老年とは死ぬことであり、包帯に巻かれることであり、埋葬されることでありますのに（あなたのご様子は）病とは無縁で咳こむこともなく、昼まで眠る人のようです。」

ここには、当時の人々がファンタジーとして思い描いた老後の理想像（究極の「大いなる良き老年」）が示されていると言えるだろう。

3. 美術における「老年」の表現

貴族の墓の壁画や浮彫には、彼らの靈魂が宿る「肉体」となる彼ら自身の姿が描かれている⁷⁾。これらの人物像は、来世で永遠に用いられるのにふさわしい理想的な姿を示しており、墓主やその家族の彫像も同じ意味を持っていたと考えられる。来世のためのこのような「理想像」はいわゆる「肖像」とはちがって個人の特徴をあまり表すことはなく、人間の一般的な特徴を余すところなく伝えるための規範に従って表現されているが⁷⁾、そこには、人間の一生のうち最も好ましい時期の姿が反映されていると言える。

この種の「理想像」は概して筋肉質かほっそりした体格で表現されており、容貌は端正で「年齢」を示す特徴はうかがえず、「活力」や「若さ」が感じられる。これは青年期から熟年にいたる時期を人生の絶頂期とし、その頃の姿こそ来世のためにふさわしいとする価値観のあらわれだろう。

しかしその一方で、第5王朝の貴族を表した「村長像」や、第4王朝クフ王の「大ピラミッド」造営責任者だったとみられるヘムイウヌの座像など、男性の姿を肥満体で表現した彫像や浮彫などがいくつも見られる²⁾。これは現代の基準から言えば必ずしも「高齢者」の姿を示すものとは言えないかもしれないが、当時の平均余命の低さからすれば、少なくとも経歴の絶頂に達した「初老」の貴族の姿を表していると言ってよいだろう²⁾。その肥満した姿は、贅沢な食事を楽しみ、肉体労働とは無縁で、日常生活でもあまり身体を動かす必要がなかった彼ら富裕層の悠々自適の老後を反映したものだだろう。それは彼らが望んだ来世の一面であり、「大いなる良き老年」あるいはその始まりを示すものでもあったのである。

とはいえ、高齢者のすべての特徴がそこに表され

ているわけではなく、顔の皺や禿頭などは、墓壁画や墓浮彫のなかで墓主のために働く庶民の姿にときおり見られるにすぎない²⁾。貴族が杖をつく姿はよく描かれたが、これはむしろ権威を示すためであり、杖で身体を支える様子が表されるのは稀だった。理想の「老後」とは「ウエストカー・パピルス物語」の呪術師ジェディにみるように、若々しさと活力を保ったものだったのである。

しかし第18王朝時代の半ば頃には、これとは異なった価値観が示される。多くの場合、地位の高い男性が年をとっていることを示す表現は相変わらず恰幅のいい体格であって、それ以外に年齢をうかがわせるような特徴は見られない。しかし、長寿を自らの正しさの証とし、110歳までも生きようという意欲を示す言葉を刻んだアメンホテプの座像(図1)の顔は、頬が落ちくぼみ、皺が刻まれた高齢者の特徴を示している²⁾。これは同じ人物を表現した他の座像(図2)が、やや肥満した体格のみで熟年あるいは初老であることを示しているのと対照的である。おそらくアメンホテプは、自分が実際に高齢に達したという誇るべき事実を、目に見える形で残そうとしたのだろう。



図2. 肥満体の特徴を示すアメンホテプの座像(第18王朝時代)

彼が仕えたアメンホテプ3世の息子にあたるアメンホテプ4世(アクエンアテン)のもとで生み出された「アマルナ美術」にも、こうした「古い」の表現は見られる。その当時の首都がおかれたアマルナで発見された小さな座像には、鼻から口元にかけて刻まれた深い皺などに年齢が表現されている^{2) 8)}。また、この「アマルナ時代」かその直後に作られたとみられる浮彫の断片には、年老いた貴族の上半身が表されている^{2) 8)}。おそらくこの浮彫があった墓

の主である彼の顔には、皺のよった額、たるんだ顎、鬢の下からのぞくほつれ毛など、高齢を示す特徴が見てとれる。しかし、王に挨拶するために挙げられた腕、まっすぐ前方に向けられた顔は衰えを感じさせず、むしろ、老いてなお活力と威厳を保ち豊饒とした貴族の姿を彷彿とさせる。これは、アメンホテプの座像の表現と同じく、老年を肯定的に捉え、自分が良く生きたことの証、「老成」を示す証とみなす価値観のあらわれと言えるかもしれない。

とはいえ、年齢を示す特徴のひとつである白髪は、上流階級の人々の表現には見られない。白髪頭は彼らの理想の「老後」にはふさわしくないとされていたのかもしれない。事実、白髪頭の人々の姿は墓壁画に描かれた庶民のなかに散見される^{2) 9)}。しかし白髪の表現は庶民だけに限られていたわけではなく、新王国時代後期(第19~20王朝)の中流階層に属していた人々にも見られる²⁾。彼らは新王国の王墓を造営した専門職人で、国家から俸給を与えられる中級公務員として職人村(現在のルクソール西岸デイル・エル＝メディーナ)に家族とともに住んでいた。この職人のひとりであるパシェドゥの墓壁画に描かれた彼の一族のうち、父親が白髪頭、母親や義理の父母が白髪まじりの頭で描かれているのである²⁾。しかし彼らの「頭髪」の形や特徴は明らかに地毛ではなく、鬢のそれである。そして彼らをはじめとするパシェドゥ一族は鬢のほか、鬢のついた上等の衣服を身につけた姿で描かれている。これは彼らが中流の豊かな生活を送っていたことを示す表現であろう。しかし、白髪の鬢や白髪まじりの鬢が作られていたことを示す証拠はなく、また、そのようなことは考えにくい。おそらくこれは、本来は鬢の下に隠される地毛の色を鬢の色のように描いて、それぞれの人物の年齢差を示そうとしたものと思われる。墓主やその妻の白髪をこうした形で表現した例はパシェドゥ以外の王墓造営職人の墓にもいくつか見られる^{2) 10)}。このような例は決して多くないとはいえ、少なくとも新王国後期中流階層のなかには白髪に対する抵抗感があまりない人々がいたと言える。彼らにとってはそうした「古い」の姿も、来世における理想の姿として受け入れられるものだったのである。

中流以上の女性の「古い」は、この白髪を除けば墓の装飾に表現されることは稀であり、おおむね粉挽きをする召使など庶民の女性の表現に限られていたと言える^{2) 11)}。中流以上の夫婦では、夫の造営した墓に妻が共に葬られるのが普通であり、墓の壁画

や浮彫、彫像に表される妻の姿は、来世において夫の魅力的な伴侶となるため、若々しく表現された¹¹⁾。しかしこれはあくまでも男性から見た理想の女性像であって、女性自身の見方とは必ずしも一致していなかったことは、女性が自分だけの墓や墓碑を作らせた数少ない例から見てとれる¹¹⁾。たとえば第一中間期のヘミラーという女性神官の墓碑(偽扉)には、若い頃だけでなく、少女時代、垂れた乳房で示される熟年あるいは初老の頃と、人生のいくつかの時期の彼女の姿が刻まれている^{12) 13)}。彼女にとっては、屈託のない少女の頃や、様々な思い出に包まれた老後も大切な時期であり、来世にぜひとも持ち越したい理想のイメージだったのである。

王妃が夫の政治上のパートナーとして重要な役割を果たした「アマルナ時代」の王妃像には、顔の皺や垂れ下がった頬など、老年の特徴を示すものが見られる¹¹⁾。また、アマルナにあった彫刻師の工房から発見された漆喰製頭像のなかにも高齢の女性を表すものが含まれる^{8) 11)}。これはおそらく王族の女性を表現したもので、少なくとも、自らの「老い」を、正しい人生の証あるいは知識と経験に裏打ちされた「老成」とみなす価値観、「老い」を肯定的に捉える見方が、当時の支配階級の女性のなかにあったことを暗示している¹¹⁾。

4. 「老い」の現実

しかしそうはいっても、古代エジプト人が年をとることに抵抗を感じていなかったわけではない。病気の症状や処方を書いた当時の医師の診療マニュアル、「医術文書」には、外見を若々しく保つための処方も記されている²⁾。たとえば前1500年頃の「エーベルス・パピルス」には、白髪を防ぎ、毛髪を生やす処方がいくつか記され¹⁴⁾、ほぼ同じ頃の「エドウィン・スミス・パピルス」には、肌を作りかえ、顔を若返らせ、老人を若者へと変えるなどといった処方が書かれているのである¹⁵⁾。年齢を重ねても外見を若々しく保ちたいという人々の願いは当時も変わりはないことがうかがえるが、このような美容術を試すことができたのが一部の富裕層だけだったことは言うまでもない。

「老年」にはもっと厳しい現実もあった。古王国の宰相の作とされている文学作品、「宰相プタハホテプの教訓」の冒頭部分では、年老いた宰相プタハホテプが王に対してこう語りかけている^{1) 2) 6) 11)}。

「おお、王よ、我がご主君！老年がここに、高齢

がやってまいりました。衰えが訪れ、弱さがつのり、子供のようになってしまった者が一日中眠っております。目はかすみ、耳は聞こえなくなり、力は衰え、心臓は萎えてしまいました。口は黙りこんで話すことがなくなり、心臓はうつろとなって過去を思い出せず、骨はいたるところ痛みます。良いものが悪いものへと変わり、どんな味もなくなってしまいました。老年が人々になすことはどこからみても悪いことばかりでございます。鼻がふさがり、息ができず、立つこと、すわることが痛みとなります。」

この悲痛な訴えからは、視覚や聴覚の衰え、(当時は理性や感情、記憶の拠り所とされていた心臓が「萎え」て「うつろ」であるという)無気力や物忘れ、リュウマチあるいは関節炎など、加齢にともなうさまざまな変化を読みとることができる¹¹⁾。この「教訓」は書記学校で官僚養成の教本に使われたもののひとつだった。老化に伴う苦しみは何も庶民だけのものではなく、中流・上流の人々にも共通していたのである。

墓に描かれた貴族の恰幅のいい姿にしても、むろん健康的な姿とは言えない。あまり運動もせず飽食を楽しみ、その一方で官僚としての出世競争に明け暮れるストレスに苦しんでいたはずの彼らのなかには、高脂血症、糖尿病、動脈硬化などの生活習慣病に悩まされていた人々が多かったはずで、それが彼らの老後にも影響を及ぼしていたであろう。事実、中流以上の人々のミイラからは、関節炎や動脈硬化、寄生虫、マラリアの抗原などの病気の痕跡が確認されており、それらが1体のミイラからいくつも見つかることさえある^{3) 14)}。しかも古代エジプト人が主食としていたパンには細かな砂粒が混入しており、パンを日常的に食べていた彼らの歯、とくに咬合面は年齢を重ねるほどすり減ることとなった^{3) 14)}。こうした歯の摩滅には歯髄が露出するほどひどいものも少なくなく、さらに裕福な人々のミイラには、贅沢な食生活が原因の虫歯や歯周病の痕跡もしばしばみられる^{3) 14)}。当時の高齢者には歯痛に悩まされていた人々が多かったことは確かだろう。

「ウエストカー・パピルスの物語」の呪術師ジェディが高齢ながら「病とは無縁で、咳こむこともなく、昼まで眠る人」のようだと評されたことから、朝早く目が覚めるだけでなく、咳をすることも高齢者の特徴とされていたことがうかがえる。おそらく砂埃や屋内の煤を長年にわたって吸い続けて塵肺症にかかり³⁾、空咳をくりかえす高齢者が多かったの

だろう。事実、「老年」や「老人」を意味するエジプト語のひとつ、ケフケフは、咳の音を表すケフケフト（「空咳」「咳き込む」）に由来する言葉と思われる²⁾。このケフケフと同じく「老年」「老人」を指す古代エジプト語にはイアウとテニがあるが、これら3つの語のつづりには、単語の意味の範疇を示す文字（「決定詞」）として、腰が曲がり、杖をついて歩く人物を描いたものが含まれる²⁾。これもまた、普通に見かける高齢者の姿だったのだろう。腰が曲がるのは骨粗鬆症の症状とされているが、当時は（そしてつい最近まで）誰にも共通する老化の特徴とされていたのである。

このように庶民ばかりでなく、比較的恵まれていたはずの人々も、晩年の日々は苦しいものだったに違いない。その苦痛のなかには、治療可能な病気とは受け取られず、「老化」につきものの現象として受け入れられていたものも少なくなかったことだろう。

5. 「老後」を支えたもの

老後がこれほど苦しいのなら、古代エジプト人はいったいいくつになるまで働いたのだろうか。当時の官僚には「定年」はなく、彼らは職務を果たすのが可能な限り、その地位にとどまるとみられる。官僚として80年以上のキャリアを持っていたバクエンコンスや、85歳にしてなお豊饒としていたアメンホテプなどは極端な例と言えるだろうが、何代もの王に仕えて、当時としてはかなりの高齢になるまで勤務したとみられる高官が何人か知られている²⁾。

しかし彼らにしても、それほど長くは生きられなかった大部分の官僚と同じく、やがては気力・体力の衰えとともに職を退くことを決めたはずであり、その頃には、かつては権威の象徴として手にしていた杖が、「古い」の身を支えるため手放せなくなっていたに違いない。「宰相プタハホテプの教訓」の冒頭で老年の苦しみを述べたプタハホテプは、続いて王に訴える^{2) 6)}。

「これなるしもべ (i.e.私) のため、『老年の杖』を作ることが命じられますように。我が息子が我が地位にたてられますように。さすれば私は、先祖の流儀を聞いた人々の言葉を、かつて神々 (の言葉) に耳を傾けたことのある人々の言葉を、この者に告げることができます」。

気力と肉体の衰えを悟った宰相は、我が子が杖のように老後を支えてくれることを願い、彼を自分の後任としてくれるよう王に嘆願しているのである。

この「老年の杖」は、父親の老後を支える息子を指す表現としてしばしば用いられており、たとえば第18王朝の国王アメンホテプ2世のもとでアメン大司祭だったアメンエムハトは、自分が若い頃、父親の「老年の杖」として常に付き添ったと墓銘に記している²⁾。

官職の世襲は古代エジプト社会では一般的だったが、官職は官僚本人が私有するものではなく、その任免は王の権限だったから、官僚が自分の地位を息子に継がせたいと思うなら、王による同意と任命が必要だった。官僚の任命は公式にはあくまでも能力主義によるものだったが、実際にはこのように官職の世襲を王が承認するというケースが多かったように思われる²⁾。王は官僚に対して農地などの給与を与えるだけでなく、彼らの引退後の生活や死後の供養を保障することも期待されていた。そのために官僚の息子を「老年の杖」として後継者（あるいは相応の地位の官僚）に任命し、一定の給与収入が引き続き得られるようにしていたと考えられている。むしろこれには官僚一族の地位や生活レベルを一定に保つという意図もあっただろうが、「老年の杖」という表現が示すように、主な狙いは官僚の老後を支えることだったと思われる。

しかしその一方で、官僚の後継者にはやはりその息子が最もふさわしいとする見方があったことも確かである。官僚養成期間として「書記学校」があったとはいえ、官僚が我が子に先人の教訓や自らの経験を伝え、職務のこつを教え込むことには「個人教授」としての価値が認められていた。たとえば、第18王朝時代に父の宰相職を継いだウセルは、父の教えと思慮深さによって正しい人間、心を開かれた人間となったと王から認められたため、自分は後継者に任じられたと墓銘に記している²⁾。息子が後継者に任命されれば古くからの教えを息子に伝えることができるというプタハホテプの言葉が示すように、引退した父親もまた、後任となった息子への助言や指導を引き受けることができた。官職の世襲は、情実や縁故に左右される可能性があったとはいえ、王権が強固で王の任免権が保たれる限りは、有能な官僚の補充とその老後の保障の仕組みとしてそれなりに機能していたと考えられる。

老境に達した官僚は引退後も、経験豊かな助言者として老後を過ごしつつ、徐々に身を引いていったことだろう。彼らの妻である中流・上流婦人たちは、身分ある女性にふさわしい「たしなみ」や古くから

の習慣、使用人を指揮して家や財産を管理する方法などを娘たちに教えたに違いない。庶民の家でも子供たちが大人の見習いをするのは当然のことで、父親は息子たちに早くから仕事の手伝いをさせていたし、母親は娘たちに家事を手伝わせ、主婦となるための基本を身につけさせていたであろう¹⁶⁾。

当時の高齢者はそれぞれの立場で社会を支えてきた経験や知恵を、次の世代へと伝える役割を果たしたのである。しかしそうした彼らの立場は、家族、とりわけ子供たちとの絆に大きく依存するものであり、世話と援助をしてくれる子供や身内がいなければ、多くの高齢者が生活していくのは困難だった。安定した老後とはなによりも家族のなかで生きることだったのであり、家族との絆は、どの階層の高齢者にとっても大切なものだったのである。

古代エジプトの「家族」は、基本的には両親と子供からなる「核家族」であり、子供たちは結婚するとそれぞれ新たな「核家族」を作るのが建前だった。しかし実際には経済的な事情などから、息子一家が両親の家に同居したり、同じ敷地に家を建てて住むこともあったとみられる。離婚した娘が親元に戻り、夫に先立たれた母親が息子の家に移り住むことも稀ではなかった。中王国時代末頃（前1790年頃）の人口調査を記録したパピルス文書には、兵士ホリと妻、息子の「核家族」が、未亡人となった母親など親族と同居し、さらにホリの死後には、父の後を継いで兵士となった息子、母と祖母（ホリの未亡人と母）を含む「三世同居」家族へと変わっていったことが記録されている²⁾。いざという時に頼れる家族が老後の保障となるという点では、当時も今も変わりがなかったのである。

第20王朝初期（前1150年頃）、デイル・エル＝メディーナの王墓造営職人ウエセクネムテトは、父親に少なくとも約10ヶ月間、エンマー小麦を毎月約190リットルずつ贈り、ボーナスなどとして支給された衣類や肉、蜂蜜なども贈っていた^{2) 17)}。彼のような職人の月給は魚や野菜などのほか、エンマー小麦が約307リットル、大麦が約115リットルであり、これらは10人家族を養える量とされているから¹⁸⁾、彼が毎月父親に贈った小麦は、高齢者1人の一ヶ月分としては明らかに多すぎる。これはおそらく（兵士ホリの場合のように）複数の親族が父親と同居しており、そのぶんの手伝いも含まれていたためだろう。ウエセクネムテトの家族の規模が小さくてそれだけの手伝いの余裕があったのかもしれない。いざ

れにせよ彼は古代エジプトの「孝行息子」のひとりだったと言えるだろう。

しかし必ずしも親孝行な子供ばかりでなかったことは言うまでもない。やはりデイル・エル＝メディーナに住んでいたナウナクトという名の婦人は、ウエセクネムテトが仕送りをしたのとはほぼ同じ頃（前1143年頃）に、自分の遺産（什器・道具類）の相続を決めた遺言書を作成している^{2) 7) 19)}。その時から約50年前に最初の夫を亡くし、当時としてはかなりの高齢だったとみられるナウナクトは、最初の夫とは子宝に恵まれず、再婚相手の王墓造営職人とのあいだに8人の子（息子と娘4人ずつ）をもうけた。ナウナクトは遺言書で、この子供たちによる遺産の分配を定めており、年老いた自分の面倒をみてくれた者には遺産を譲るが、そうでない者には相続権を認めないと述べている。

母に孝行したとされ、遺産の相続を認められたのは息子3人と娘2人で、そのうち息子の1人ケンビルケベシェフにはさらに高価な青銅製の盥が贈られている。これは何か格別の孝養を尽くしたためか、彼が長男だったことを示すものかもしれない^{2) 19)}。長男であれば親の死後は埋葬と供養をとりおこなう義務があり、そのための費用を準備しておく必要があったのである²⁰⁾。娘の1人メナトナクトによる相続については、他の4人がナウナクトに贈ったエンマー小麦と脂を相続分から除外するとされていた。遺産を受け取る子供たちのうちメナトナクト以外の4人はこの小麦と脂を毎月、母親に仕送りしていたとみられる^{2) 19)}。メナトナクトがこの仕送りをなぜ分担しなかったのかは不明だが、少なくとも子供たちの心遣いに対して、ナウナクトが感謝の気持ちを表そうとしていたことは確かと言える。

年老いたナウナクトの世話をしなかったため彼女の遺産の相続を許されなかったのは息子1人と娘2人だったが、そのうち息子のネフェルホテプについては、「彼が自分のパンを買えるように」いくつかの容器や道具の相続が認められている。親孝行ではなかったとはいえ生活に困っていた息子を、ナウナクトは親として見捨てられなかったのだろう。一方、結婚している娘たちの生活は嫁ぎ先の責任とみていたのかもしれない。父親の後を継ぐ息子（ふつうは長男）だけでなく、男女に関わりなく他の子供もまた、老後の親の世話をすべきものとされており、それを怠れば親の遺産を相続できなくなる場合があったのである。

古代エジプト社会には、すべての高齢者を支援する仕組みは存在せず、貴族など有力者が慈善として（あるいは自らの権威を誇示するために）身寄りのない老人への支援を行ったり、王が年老いた臣下に農地や特権、名誉職を与え、贈物をする程度だった²⁾。当時のどの階層の人々にとっても、結婚して子供をもうけることが老後の保障の基本だったのであり、自らの意志で独身を通す生き方は例外的だったと言える。

結婚しても子宝に恵まれず、父親の後を継ぐ男子が生まれない場合にはどうしたのだろうか。子供が生まれて無事に育つ確率を高める「一夫多妻」は国王など一部の人々に限られており、大多数の人々は「一夫一妻」を通していたとみられる²⁾。離婚は格別珍しいことではなかったが、妻に子が生まれなことを唯一の理由とする離婚があったかどうかは定かでない²⁾。

子供が生まれない場合の対策として確かに行われていたことが記録に残るのは、養子縁組だった²⁾。これには、身寄りのない子供を引き取り、あるいは血縁のない若者の人柄を見込んで養子とするほか、夫が妻の公認のもとで奴隷の女性に子を産ませ、養子とする場合があった。たとえば子宝に恵まれなかった夫妻の養子縁組について記録した新王国末（前1100年頃）の文書^{2) 21)}によると、夫のネブネフェルはまず、妻のネネフェルを自分の「養子」としている。当時、夫の遺産を相続できるのは妻子とされていたが、子がない場合は夫の兄弟姉妹にも相続権が生じるため、妻を「養子」にすることで、自分の遺産をすべて妻のものにしようとしたのである^{2) 21)}。それから夫婦が買った女奴隷に、ネブネフェルが息子1人と娘2人を生ませた。夫の死後、未亡人ネネフェルは子供たちを養育し、そのうち年長の娘は、ネネフェルの弟パディウと結婚して自由の身となる。そして18年後、ネネフェルは女奴隷の子供たちのうち残る2人をも奴隷の身分から解放したうえで、パディウとともに自分の「養子」とし、彼らとパディウ夫妻を相続人に指定、そのかわりに自分の老後の世話をすることを義務づけた。「養子縁組」は、実子以外の者を相続人とするために利用されただけでなく、頼るべき子のない未亡人の老後を保障する手段ともなっていたのである。

6. おわりに

古代エジプト人の「老後」は早く訪れ、多くの場

合、短いものだった。それははるかに進歩した医療や科学技術、衛生的で安全な生活環境に恵まれ、公的扶助が得られる我々の「老後」にくらべれば、苦しく不安定なものだったと言える。しかし当時の高齢者は昔からの知恵や自らの人生で得た知識と経験を次の世代に伝えつつ、家族との深い絆に支えられて生きていくことができた。「大いなる良き老年」は彼らの多くにとって叶わぬ夢だったが、良い家庭に恵まれて少しでも長く生きられれば、それは神による恩寵のしるしであり、正しい人生を送ったことが認められた証であった。未来を若い世代へと託すことができた古代エジプトの高齢者たちは、死後は来世に復活することを信じつつ、残された日々を懸命に生きていたのである。

* 本稿は、2013年度明倫短期大学公開講座（第3回、2013年11月2日）の講演内容に、加筆・修正を施したものである。

文 献

- 1) ストロウハル、エヴジェン（内田杉彦訳）：図説古代エジプト生活誌。下巻、237-244、原書房、東京、1996
- 2) Janssen, Rosalind M. and Jac.J.Janssen: Getting Old in Ancient Egypt. The Rubicon Press, London, 1996
- 3) 内田杉彦：古代エジプト人と病気。明倫歯誌、3 (1) : 60-66, 2000
- 4) Janssen, Rosalind M. and Jac.J. Janssen: Growing up in Ancient Egypt. 72, The Rubicon Press, London, 1990
- 5) Varille, Alexandre : Inscriptions concernant l'architecte Amenhotep fils de Hapou. 4-8, pl.I, Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale, Le Caire, 1968
- 6) Lichtheim, Miriam: Ancient Egyptian Literature, Vol.1. 62-63, 218, University of California Press, Berkeley, 1975
- 7) 内田杉彦：エジプト美術入門。明倫歯誌、4(1) : 76-81, 2001
- 8) Freed, Rita E. et al.: Pharaohs of the Sun Akhenaten・Nefertiti・Tutankhamen. 247(139), 255(172), 281(261), Museum of Fine Arts, Boston, 1999
- 9) Shedid, Abdel Ghaffar und Matthias Seidel: Das Grab des Nacht : Kunst und Geschichte eines

- Beamtengrabes der 18. Dynastie in Theben-West. 66-70, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 1991
- 10) Shedid, Abdel Ghaffar : Das Grab des Sennedjem : Ein Künstlergrab der 19. Dynastie in Deir el Medineh. 78-79, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 1994
 - 11) Sweeney, Deborah : Elder Women in Ancient Egypt. http://archaeology.tau.ac.il/?page_id=1537 (2013/09/09)
 - 12) Fischer, Henry G. : Some Early Monuments from Busiris, in the Egyptian Delta : The Fitzwilliam Museum False Door. Metropolitan Museum Journal 11 : 14-22, 1976
 - 13) Wilkinson, Toby : Lives of the Ancient Egyptians. 92-94, Thames & Hudson, London, 2007
 - 14) Nunn, John F. : Ancient Egyptian Medicine. 64-95, 149-150, 203-205, British Museum Press, London, 1996
 - 15) Allen, James P. : The Art of Medicine in Ancient Egypt. 112-113, The Metropolitan Museum of Art, New York, 2005
 - 16) 内田杉彦：古代エジプトの子供たち—ナイルのほとりに生まれて—。明倫歯誌, 9 (1) : 41-47, 2006
 - 17) McDowell, A.G. : Hieratic Ostraca in the Hunterian Museum Glasgow (The Collin Campbell Ostraca). 11-12, pls. VIII-IX, Griffith Institute, Oxford, 1993
 - 18) Janssen, Jac.J. : Commodity Prices from the Ramessid Period : An Economic Study of the Village of Necropolis Workmen at Thebes. 462-463, E.J.Brill, Leiden, 1975
 - 19) Cerny, J. : The Will of Naunakhte and the Related Documents. Journal of Egyptian Archaeology 31 : 29-53, 1945
 - 20) 内田杉彦：古代エジプトの女たち。明倫歯誌, 10 (1) : 48-55, 2007
 - 21) Gardiner, Alan H. : Adoption Extraordinary. Journal of Egyptian Archaeology 26:23-29, 1940